

サイトラにおける認知プロセス

－分割・保持・組換え－

石塚浩之

(広島修道大学)

Abstract

This paper focuses on sight translation and examines the cognitive process at play during the task. Sight translation can be used as a training method for simultaneous interpreting since both require progressive translation as a key feature: rendering segments of the source text into the target text, while keeping the order of the segments as they are. The cognitive process used for sight translation will be explored in three stages: segmentation, retention, and reorganisation. The segmentation stage includes two aspects: the segmentation of linguistic expressions, and the construction of translation units for each segment. During the retention stage, two types of information contribute to the construction of translation units for progressive translation. Finally, at the reorganisation stage, information from the translation unit is reorganised at a conceptual level. Describing all three stages, this study provides a cognitive model for sight translation as a basis for empirical or applied studies.

1. はじめに

サイト・トランスレーション（以下、サイトラ）の実行には、順送りの訳出が不可欠である。順送りの訳出とは、情報の順序という観点から、起点テキスト（ST）と目標テキスト（TT）の表層的構造を保持する訳出であり、日本語と英語のように統語的な隔たりの大きい言語間の作業においては、単なる二言語間のコード変換ではない処理が必要である。この処理の実態はどのようなものであろうか。本稿の目的は、順送りの訳出の背後にある認知処理の考察にある。人は自らの認知処理のすべてを自覚することはできず、自覚可能な処理は実際の認知処理のごく一部に過ぎない。これはサイトラにおいても同様である。順送りの訳出自体は意識的方略として制御可能であるが、その方略の実行には通常は意識されない様々な認知的作業が関わっている。そのような認知処理を素描するため、本稿ではサイトラを実行するための処理のうち分割・保持・組換えの三つの側面に注目し、規範訳の

分析に基づきこれらのプロセスが順送りの訳出において果たす役割を具体化する。データには同一の起点テキスト (ST) に対して作成した3通りの目標テキスト (TT) を使用し、それぞれの訳出に見られる特徴と差異を分析する。

第2節では本研究の対象と位置づけを明確にし、本稿で記述する認知プロセスを構成する三段階についての考え方および分析データについて述べる。第3節から第5節ではデータの観察を基に認知プロセスの各段階が順送りの訳出において果たす役割を具体化する。第6節では、本稿の記述の課題と可能性について考察し、第7節を結語とする。

2. 対象・視点・データ

本節では、本稿におけるサイトラの位置づけを明確にし、認知プロセスのとらえ方について述べ、使用データについて紹介する。

2.1 同時通訳訓練としてのサイトラ

サイトラは通訳（あるいは翻訳）の一種である。この用語が複数の異なる作業を意味することは通訳関係者に広く知られている¹。しかし、本稿では、実証研究への発展および応用研究への可能性を視野に入れ、ひとまず同時通訳の導入訓練として行われる文字原稿からの口頭訳出に対象を絞り分析と考察を進める。

同時通訳訓練としてのサイトラの有効性に関する評価は論者により分かれる。Viezzi (1989) は二つの作業の差異を強調し、その効果に否定的である。一方、Viaggio (1992) はまさにその違いこそが訓練の意義につながるのだと主張する。おそらく両者の見解の違いはとらえ方の違いであり、一方が正しく、他方が誤りというものではない。サイトラは同時通訳ではない。同時通訳そのものの練習とは異なる面があるのは当然である。サイトラが同時通訳の訓練に使用される背景としては、通訳訓練の現場でサイトラと同時通訳にはなんらかの共通点があるという想定があると考えられる。目的の作業と訓練に共通点がないならば効果は期待できない。

サイトラと同時通訳は順送りの訳出という共通点を持つが、入力モードと訳出ペースの制御に違いがある。文字による入力が音声による入力よりも訳出の難易度を下げるかどうかはわからない。「文字から音声へ」のサイトラと「音声から音声へ」の同時通訳では並行作業の内容も異なる。十分な聴解力を前提とすれば、文字入力のほうが訳出の難易度を高めるという可能性もある。しかし、文字による入力は訳出ペースの制御を可能とする。音声による絶え間ない入力を逃れ、ある程度、訳出ペースを制御できる環境は、疑いなく訳出の難易度を下げる効果がある。つまり、サイトラとは、文字による入力により訳出ペースを制御できないことによる圧力を軽減し、順送りの訳出を行う力を養うための訓練であると位置づけられる。入力モードの違い、訳出ペースの制御の違いから、サイトラは同時通訳訓練として不十分な面もあるだろう。これについては他の訓練方法を用いることで解決することができよう。

2.2 認知プロセスのとらえ方

順送りの訳出を実現するための認知プロセスとしてはどのような要素を抽出すべきであろうか。本稿では、順送りの訳出を実現するために不可欠な役割を果たす認知プロセスを分割・保持・組換えの三段階から考察する。

順送りの訳出とは、ST の情報の順序を TT で保つということである。情報に順序を認める以上、情報は分割しうるということになる。順送りの訳の前提として、まず ST の情報は分割されねばならない。この分割はどのように訳出するかに影響を及ぼし、時には順送りの訳出を困難とする。そこで第 3 節ではこの分割について取り上げる。

また、順送りの訳出のため、ST の対応箇所には含まれない表現を TT に補足することがある。補足表現の情報は ST の先行部分に見つかることが多く、訳者は ST の先行部分に含まれている情報をその部分の訳出が済んでも保持していると考えられる。では、どのような情報がどのように保持されているのであろうか。本稿では情報の保持と活用を ST の理解という観点でとらえ、第 4 節では順送りの訳出のための情報保持を分析する。

さらに、特に日本語と英語の場合、統語上の違いも順送りの訳出のための障害となりがちである。目標言語での適切性を保ちつつ順送りで訳出するためには様々な形で ST の言語形式から逸脱した訳出を行わねばならない場合も多い。本稿ではこうした訳出の背後に認知的な情報操作を想定し、これを組換えと呼び、第 5 節でその諸相を見る。

翻訳一般を ST の入力から TT の産出に至る行為ととらえるならば、入力工程と産出工程をその認知プロセスの両端と考えることができる。また、入力するものと産出するものが異なる以上、その中間に加工工程を想定せねばならない。この観点から、入力・中間工程・産出は通訳・翻訳の認知プロセスモデルとしては必須の構成要素であるが、分割・保持・組換えの各段階は、それぞれ入力・中間工程・産出と密接な関係を持つ。この点からも、本稿の三段階モデルにより、サイトラの認知プロセスが備えるべき最低限かつ主要な要素をとらえうるものとする。

2.3 データについて

本稿ではサイトラの認知プロセスの記述のため、英語から日本語への訳出を分析する。規範的な訳出は、ある ST に対して定まる唯一の理想的訳出ではない。本稿では 3 人の訳者が同一の ST に対して独立して作成した 3 種類の TT をデータとして使用する²。本稿の目的を満たす訳者の要件は、訳出の妥当性の判断力のみであり、必ずしも実務経験、教育経験は求められないが、3 人の訳者はいずれも通訳の実務および教育において相当の経験（15 年から 40 年）を持つことから本研究の要件を十分に満たすものと見なせる。本研究では、同一の ST に対する 3 種類の TT を得たことにより、データ間の共通点および差異を比較することができ、訳出の個人差や普遍性についての考察も可能である。

ST には、2016 年 11 月 8 日の米大統領選挙でのドナルド・トランプ氏勝利の後、12 月 5 日に行われたノーム・チョムスキー氏による講演の冒頭部分の書き起こしを採用した。TT

の記録は、訳出のタイミングを考慮し、訳者自身が ST の下の行に文字で記載した。ある ST 表現に対する TT 表現の記述位置は、それぞれの訳者が ST の該当箇所まで目をやった段階でどのような TT の産出が可能であるかを考え決定した。すなわち、実際に口頭でのサイトラを行った場合、ある ST 表現を目視している時点で訳出されるであろう TT 表現がその ST 表現の下に記載されている。

以上、本節では、本稿でのサイトラのとらえ方、記述の視点、および、使用データについて概説した。以下、第3節から第5節では、データの観察からサイトラの訳出を分析し、順送りの処理を可能とする認知処理のありかたについて考察する。

3. 分割

順送りの訳出を可能とするためには、まず ST を適当な断片に分割する必要がある。文法的に可能な文の長さに限界はないが、実際の ST はある程度の長さの文の連続であり、これを基に産出される TT も同様である。サイトラにおいては順送りの訳出を実現するため、訳出可能な情報のまとまりの判断が重要となる。以下では、この分割のありかたについて検証する。

ここで、「断片」と「情報のまとまり」という言葉を使用した。両者は別のものである。本研究では、以下の通りこの二つを区別する。

(1) a. 起点切片：順送りの訳出のために分割された ST の断片。

b. 訳出単位：訳出のため起点切片を基に構築された情報のまとまり。

両者の区別は言語表現の分割と情報の分割の違いである。前者は ST の言語表現をどこで区切るかということであり、言語形式（文字あるいは音声を媒体とする一連の記号列）で特定され、認知的には断片的な言語表示である。これを本稿では起点切片という。後者はその起点切片を基に構築した意味表示であり、ひとまとまりの TT を産出するための情報のまとまりである。これを訳出単位という。訳出単位には起点切片に含まれる言語表現のコード的意味のほか、先行ディスコースの理解内容をはじめとする様々な文脈情報が語用論的推論により取り込まれ、訳出可能な意味のまとまりを構成している。訳出の認知プロセスを論じるうえでは起点切片のみでなく、訳出単位を考える必要がある。

では、訳出単位はどのように判定すべきであろうか。訳者の頭の中の情報を直接的に観察する手立てはないが、本稿では TT を訳者の認知状態の反映ととらえる。TT の産出にあたり、どの時点でどの程度の情報を捉えていたかを正確に知ることはできないが、句や節といった文法単位に訳者による情報の分割を認めることは可能だろう。特に節を作るためには述語に相当する事象、項に対応する参与者、さらに参与者の役割といった情報をまとまりとしてとらえることが必要である。そこで本稿では TT の節を訳者による訳出単位として分析を進める。

ただし、訳出単位をさらに小さな情報に分けて考えることも可能である。作動記憶研究では人間が一度に保持できるチャンク(記憶項目)の数は4個前後と考えられている (Cowan 2005)。これに従い、水野 (2015: 219) は同時通訳の訳出単位には最大 3-4 個までの項目が含まれると考えている。サイトラの訳出単位においてもほぼ同様と考えるべきだろう。Cowan (2005) はチャンクについて明確な定義を行っていない。水野 (2015: 162) は先行研究を詳細に検討した結果、同時通訳におけるチャンクについての明確な答えを与えるのは難しいとしつつ、チャンクを自然言語として扱っている。本稿では、順送りの訳出における作動記憶の制約についての考え方は支持するが、チャンクを言語表現のみで計測しようという立場はとらず、チャンク数の計測について具体的に踏み込むことは避ける。

本稿で使用するデータは4行を単位とし、Eで始まる一番上の行がSTである。2行目から4行目がTTであり、3人の訳者A、B、Cの訳出をそれぞれJA、JB、JCとして区別している。さらに各行に3桁の行番号を付した。また、上で述べたとおり、それぞれの訳出のタイミングはSTに対するTTの文字の位置で示している。

まず、(2) では “Well, my wife and I happened to be in Europe on November 8th, that fateful day, in fact, in Barcelona, where we watched the results come in”. (E006) という一文を3人の訳者がどのように分割したかに注目する。

(2)

E006	Well, my wife and I happened to be in Europe on November 8th, that fateful		
JA006	私の妻と私は	たまたま	ヨーロッパにいました。11月8日の
JB006	ばなりません。	妻と私は たまたま	11月8日に
JC006	妻と私は、	たまたま	ヨーロッパで11月8日を過ごしており、
E007	day, in fact, in Barcelona, where we watched the results come in. Now, that		
JA007	あの運命的な日です。	バルセロナで	あの結果を見ました。
JB007	ヨーロッパにいました。	あの運命の日	バルセロナにいて、結果を見ました。
JC007	あの運命の日には実はバルセロナで、		選挙結果が出るのを見ました。さて

訳出に見られる節の切れ目を分割箇所と判断すると、訳者Aはこの部分を三つの節で訳出しており、三つのまとまりとしてとらえているのに対し、訳者B、Cはいずれも二つの節で処理しており、二つのまとまりとしてとらえていることがわかる。この違いは “on November 8th” (E006) の扱いの差による。訳者Aは “on November 8th” (E006) の前で分割を実行し、「私の妻と私はたまたまヨーロッパにいました」(JA006) で文を作っているのに対し、訳者Bはその後で分割し、「妻と私はたまたま11月8日にヨーロッパにいました」(JB006) としている。この例は分割にはある程度の個人差があるということを示す。つまり、順送りの訳出のための分割は所与のSTに対し一意的に定まるわけではない³。

この分割箇所の違いにより訳出処理にも差が表れる。訳者Aは「11月8日のあの運命的

な日です」(JA006) とし、“on November 8th, that fateful day” (E006) を日付情報としてまとめている。一方、訳者 B は日付情報を分割し、“that fateful day” (E006) を「あの運命の日バルセロナにいて、結果を見ました」(JB007) というまとまりの中で処理している。訳者 C はこの部分を一文で訳出しているが、節の数は二つであり、日付情報の処理は訳者 B と同様である。この例は“on November 8th” (E006) と“that fateful day” (E006) という並列する要素をどの事象にまとめて処理するかという判断の違いであり、訳出処理の難易度はそれほど変わらないと思われる。しかし、分割処理が訳出の難易度に相当の影響を与えることもあり得る⁴。

分割の問題は順送りの訳出とはなにかという問題にも関連する。おおざっぱに言えば、順送りとは ST の情報順序を TT で変更しないということであるが、この原則は起点切片の順序に適用される。そして、起点切片の内部では必ずしも情報項目の順序は保持されない。あるいは、その必要がない。例えば“in Barcelona, where we watched the results come in” (E007) の処理を見てみよう。三人の訳者の処理は類似しており、“in Barcelona” (E007) で分割を行っていることは「バルセロナで」(JA007)、「バルセロナにいて」(JB007)、「バルセロナで」(JC007) の後に空白があることからわかる。その後はそれぞれ「あの結果を見ました」(JA007)、「結果を見ました」(JB007)、「選挙結果が出るのを見ました」(JC007) と訳出しており、分割箇所単位では順送りを守っている。しかし、“where we watched the results” (E007) の“watched” (E007) と“the results” (E007) の語順に関しては三人の訳者はすべて逆送りでの訳出を行っている。どこで分割するかということは、順送りの単位をいかに確定するかということであり、ここでの判断の誤りは訳出の破綻にもつながる。

別の例を見てみよう。(3) では“it depicted a caricature of Donald Trump presented as a meteor hurtling towards Earth” (E020) に含まれる“Donald Trump” (E020) をそれぞれの訳者がどのように扱ったかに注目する。

(3)

E020	German weekly, Der Spiegel. It depicted a caricature of Donald Trump
JA020	ドイツの週刊誌 デア・シュピーゲルの表紙でした。そこには、風刺漫画があり、
JB020	ドイツの大手週刊誌、シュピーゲルの表紙に見られます。それは
JC020	ドイツの主力週刊誌『デア・シュピーゲル』の表紙でした。そこに描かれている風刺画はトランプ大統領が
E021	presented as a meteor hurtling towards Earth, mouth open, ready to swallow
JA021	トランプが地球に向かって突進する流星として描かれています。口を大きく開け、
JB021	ドナルド・トランプが流星に戯画化され、地球に突進し、口を開けて、
JC021	隕石となって地球に向かい、口を開けて、まさに丸飲みしようと

訳者 A は「そこには、風刺漫画があり」(JA020) と節を作っていることから“Donald Trump” (E020) の前で ST を分割していることがわかる。これにより“it depicted a caricature” (E020)

を「風刺漫画があり」(JA020)として訳出し、次は「トランプ」を主題とした節を作ることができる。これに対し、訳者 B は「それはドナルド・トランプが流星に戯画化され」(JB020)と訳出しており、“Donald Trump” (E020) の後で分割していると判断できる。そのため、“It depicted a caricature” (E020) はトランプを被動作主とする事象として「戯画化」(JB020) と処理されている。訳者 C は「そこに描かれている風刺画は」(JC020) としており TT を節で区切っていないが、風刺画を主題とし、その内容としてトランプを動作主とする事象の描写を行っていることから、“Donald Trump” (E020) の前でいったん情報のまとまりを作りつつ、文法的な適切性を保ちつつ TT を紡いでいこうとしていると考えられる。ここでは“Donald Trump” (E020) で分割を行うかどうか訳出の処理に影響を及ぼしている。

書記言語の翻訳においては、静止した文字を目で確認できるため、句・節・文といった文法単位の分析が容易であるため、これを変更せずそのまま訳出単位として採用しやすい。同時通訳では、訳出単位が文法単位と一致しない場合も珍しくはない。サイトラの場合、文字テキストが現前するため、音声入力の同時通訳よりは文法単位を手がかりとしやすいだろうが、どこで分割するかにはある程度の個人差もある。また、分割の仕方によっては順送りの訳が難しくなる。サイトラや同時通訳の場合、ST を分割する技術が書記言語間の翻訳以上に重要である。

サイトラや同時通訳における分割処理は入力情報の制御である。順送りの訳出を行うためには、まず ST からの言語情報を区切り、訳出のために十分な情報を捉える必要がある。サイトラの場合、固定した文字によるテキストを使用することで、より分析的に分割を行うことができ、作業後に検証することもできる。一方、同時通訳では分割位置の個人差はより大きくなることが予想される。

既に見た通り、(2) の例で訳者 A は「描かれています」(JA021) という訳出を行っている。訳者 A は “It depicted a caricature” (E020) を起点切片とし、「風刺漫画があり」(JA020) と訳出している。しかし、その時点で訳者 A はこの起点切片から得た情報を破棄したわけではなく、“depicted” (E020) から得た情報を後続する起点切片の処理に活用している。ある起点切片に含まれる情報はそれが含まれる個所の訳出が済めば破棄されるわけではなく、後続テキストの処理に活用されるものがある。次節ではこの現象が順送りの訳において果たす役割について考える。

4. 保持

訳出において意識を集中せねばならない箇所はその時点で訳出すべき起点切片であり、ある起点切片を訳出すればその言語表現そのものを記憶しておく必要はない。とはいえ、すべてを忘れてしまうわけにはいかない。起点切片にはその個所を訳出するためには十分な情報が含まれているとは限らず、先行部分に含まれていた情報を補足処理に使う場合がある。かといって、先行部分に含まれる情報をすべて覚えておくことは不可能である。では、どのような情報がどのように保持されるのであろうか。この節では順送りの訳出に必

要とされる情報保持についていくつかの例を基に検討する。

(4) の例では訳者 A の「書きました」(JA012) および訳者 C の「論じました」(JC012) に注目する。

(4)

E008 had special personal resonance for me. The first article I wrote, or at least
JA008 それは、特別な個人的な思いを呼び起こしました。私 が書いた最初の
JB008 今は それは 私にとって特別の意味を持ちます。
JC008 その結果には特別な個人的思いを喚起されました。 最初に論文を書いたのは、少なくとも

E009 that I can remember, was in February 1939 at the—it was about the fall of
JA009 論文、覚えている限り最初だと思いますが、それを書いたのは1939年2月でした。
JB009 私の最初の論文、少なくとも憶えている限りの最初のもは、1939年2月の
JC009 覚えている限りのものですが、1939年2月でした。 それは、

E010 Barcelona to Franco's fascist forces. And the article, which I'm sure it was not
JA010 ちょうど バルセロナがフランコファシスト軍の手に落ちようとしていた時です。
JB010 論文でした。それはバルセロナがフランコファシスト勢力の手に落ちる
JC010 フランコ将軍の独裁勢力によるバルセロナ陥落についてです。 その論文は、たいして

E011 very memorable, was about the apparently inexorable spread of fascism over
JA011 私の論文はそれ程記憶されているものではないと思いますが、ファシズムが容赦なく
JB011 ころでした。その論文は、非常に思いで深いものですが、一見不可避に思える
JC011 良い出来ではありませんでしたが、容赦なく広がる全体主義が、

E012 Europe and maybe the whole world. I'm old enough to have been able to listen
JA012 ヨーロッパ、そして全世界に広がっていかうと書きました。
JB012 ファシズムのヨーロッパ、あるいは全世界への拡大に関するものでした。私は
JC012 ヨーロッパとおそらくは全世界を覆っているようだと論じました。 私の年頃ならば

訳者 A の「ファシズムが容赦なくヨーロッパ、そして全世界に広がっていかうと書きました」(JA011) は “was about the apparently inexorable spread of fascism over Europe and maybe the whole world” (E011) に対応するが、ST のこの個所には「書きました」(JA012) に対応する情報は見当たらない。この「書きました」(JA012) は “the apparently inexorable spread of fascism” (E011) を主題としてとらえ訳出するために引き出された述語であり、訳者 A はこの構文を TT に採用することで順送りの訳出を実現しているのである。

この「書きました」(JA012) の情報源はどこにあるのであろうか。直前に “article” (E010) があり、一般的に「記事」は書かれるものではあるが、だからといって直ちに「書きました」という補足表現が可能となるわけではない。「記事」と「書く」を結び付けるだけなら

「書かれました」とすることもできる。ここで「書きました」という表現を使うためには“article” (E010) と原発話者との関係の理解が必要であり、そのための情報は“The first article I wrote” (E008) に求められる。ただし、語彙的に「書く」という意味を持つ語としての“wrote” (E008) を言語形式として保持する必要はない。「記事」と「書き手としての原発話者」の情報が一体として訳者の認知環境に残っていれば、“article” (E010) を訳出する際、この訳出に必要な情報は検索可能である。

では、なぜこの情報は保持されたのであろうか。“The first article I wrote” (E008) で現れた情報を JA012 の訳出まで保持するには相応の労力を要する。情報保持がなされるためには、その必要性の判断を下すための要素があるはずである。ここでそうした情報選択の動機となりうる要素を探すと“about” (E011) が見つかる。この“about” (E011) により、後続する情報が“article” (E010) と関連付けられる。あとは E007 と E011 の article が同一の指示対象であるということが認識できれば、“wrote” (E008) との関連付けは自動的になされる。つまり、この訳出の背後には (5) の二つの情報の保持がなければならない。

(5) a. 書き手としての原発話者を含む「記事」についての情報

b. “about” (E011) に動機づけられた「記事」と後続情報の関係についての情報

ここで保持されたのは英語の write/wrote であろうか、それとも日本語の「書く」「書いた」であろうか。船山 (2006) は発話理解を支える非言語的概念の働きをモデル化している。本稿はこの考え方を支持し、個別言語の形式から解放された概念が保持されたと考える。これは個別言語の言語形式が保持されていないとか、言語形式を保持してはならないという主張ではなく、言語形式が保持されるかどうかはともかく少なくとも概念情報の保持は不可欠であるという主張である。ここでいう概念は、ある状況における発話を契機として構築された心的表示であるが、発話の言語形式にコード化された意味（言語的意味）の他、各種の非言語的情報を資源とし、ディスコース処理を支える一貫性と同時に特定の言語形式に縛られない流動性をもつ（石塚 2016 参照）。

ここからは、言語情報と概念情報を区別するため、シングル引用符付きの語句によりそのことばで表すことのできる情報を含む概念を示し、二重引用符付きの英語表現および鍵括弧で囲んだ日本語表現によりデータからの引用を示すこととする。例えば ‘dog’ は “dog” という発話から構築され、dog あるいは「犬」と表現可能な概念を指す。便宜上、概念情報は英語で示すが、これは訳者の認知環境において情報が英語で表示されていることを意味するものではない。

この例では“about” (E011) から構築された ‘about’ を動機とし、“wrote” (E008) から構築された ‘wrote’ が保持されていたと記述できる。訳者 A は「ファシズムが容赦なくヨーロッパ、そして全世界に広がっていきこうとしている」(JA011) という訳出を行いつつ、‘about’ を保持することにより、この部分を ‘article’ と結びつけているのである。‘article’ は

“The first article I wrote” (E008) を処理した際に概念化され、これを生み出す行為と動作主がひとまとまりの情報として保持されている。

「書きました」(JA912) が必ずしも “wrote” (E008) の言語情報の保持でなくてもよいことは、他の訳者による同様の処理から確かめられる。訳者 C は同じ個所で「論じました」(JC012) という訳語を使用しており、これは訳者 A と同様の処理で記事と書き手の関係を捉えているためと見なせるが、「論じました」は write に辞書的に対応する訳語ではない。保持されているのは write の言語形式ではなく、記事と書き手としての原発話者の関係である。



図 1

図 1 は ‘write’ とそれに対応する英語と日本語の表現の関係を示している。‘write’ は “wrote” (E008) を直接の情報源として構築されているが、英語の write あるいは日本語の「書く」を保持する必要はない。訳出が必要な場合には「書く」としても「論じる」としてもかまわない。重要なのは ‘about’ により捉えられた ‘article’ と原発話者の関係の訳出である。

保持された概念の非言語的性格は、“about” (E011) の場合を考えるほうがわかりやすい。保持された情報は英語の about であろうか。それとも日本語の「について」などであろうか。訳者 B には「に関する」という表現が “about” (E011) に対応すると考えられるが、訳者 A および C は “about” (E011) に対応する表現を訳出していない。しかし、いずれの訳出も about の把握なしにはあり得ない。

(5a) と (5b) は、「書きました」(JA012) という訳出の際に構築されていた概念の構成要素であり、それ自体が二種類の異なる性質の概念である。(5a) はディスコースで表象された事物についての情報である。一方、(5b) はディスコースの情報配列に関する情報、すなわちディスコース内で隣接する二つの情報がどのような関係にあるかという情報であり、言い換えれば情報についての情報である。本稿ではこの二つを内容的概念と機能的概念として区別する。機能的概念は内容的な諸概念の関係を把握するために役割を果たす。訳者は機能的概念の活用によりディスコースの流れを捉え、後続部分の処理のために必要な情報を保持することができる。

訳者 B の場合、「関するものでした」(JB012) は “about” (E011) に対応し、より直訳的であり、ここで記事と書き手の関係をうかがわせる概念の保持は他の訳者ほど明らかではない。しかし、(6) では訳者 B の訳出にも同様の保持の形跡がうかがえる。

(6)

E020	German weekly, Der Spiegel. It depicted a caricature of Donald Trump
JA020	ドイツの週刊誌 デア・シュピーゲルの表紙でした。そこには、風刺漫画があり、
JB020	ドイツの大手週刊誌、シュピーゲルの表紙に見られます。それは
JC020	ドイツの主力週刊誌『デア・シュピーゲル』の表紙でした。そこに描かれている風刺画はトランプ大統領が
E021	presented as a meteor hurtling towards Earth, mouth open, ready to swallow
JA021	トランプが地球に向かって突進する流星として描かれています。口を大きく開け、
JB021	ドナルド・トランプが流星に戯画化され、地球に突進し、口を開けて、
JC021	隕石となって地球に向かい、口を開けて、まさに丸飲みしようと
E022	it up. And the top headline read "Das Ende Der Welt!" "The End of the World."
JA022	地球を飲み込もうとしています。そして、大見出しには、
JB022	地球を飲み込もうという絵でした。そして大見出しは地球
JC022	しています。大見出しは「世界の終わり」、

この例では訳者Bの「地球を飲み込もうとする絵でした」(JB022)は“ready to swallow it up”(E021)に対応する。この部分には「絵」(JB022)に対応する情報は含まれていない。ここでの「絵でした」(JB022)をSTにはない補足情報と見なすこともできる。訳者BはSTのこの個所における主題を“caricature”(E020)ととらえており、これを補足情報として活用したと説明することもできる。しかし、なぜ他でもないこの個所でこの主題を保持する必要があるのか、補足情報とはどのような情報なのかを説明するためには、内容的概念と機能的概念の2種類に注目した説明が有効である。

ここで‘caricature’の保持の契機となった要素としては“of”(E020)および“as”(E021)を指摘することができる。これらの機能的概念の働きにより、“Donald Trump”(E020)、“meteor”(E021)、“Earth”(E021)などが‘caricature’と関連付けられ、結果として構築された複合概念が全体として持続したのである。書記言語の翻訳であれば、“a caricature of Donald Trump presented as a meteor hurtling ...”を「...に突進する流星として描かれたドナルド・トランプの戯画」と逆送りの訳出をすることも一般的であろう。しかし、それではサイトラにならない。‘caricature’を核として構築された概念が保持されていたからこそ、“a meteor”(E021)以下を順送りで訳出した際、「絵でした」(JB022)という表現を引き出すことができたのである。ここで「絵」は‘caricature’の辞書的な訳語ではなく、これら別の言語での二語は概念的に上位語と下位語の関係にある。こうした訳出から、一般に概念の保持が長期化すると言語形式からの離脱が起こりやすく、上位語などが使用されやすい傾向が予測される。

(5)の「書きました」(JA012)、「論じました」(JC012)、(6)の「絵でした」(JB022)といった訳出は、こうした情報がそれぞれ‘article’や‘caricature’を核とする概念に含まれており、訳出に活用されていることを示唆する。こうした保持を可能とする認知的仕組みを考

えるためには、テキストレベルの分割、すなわち ST の切片化を考えるだけでは不十分であり、分割のもう一つのレベル、すなわち訳出単位を別に考察する必要がある。

先行部分に含まれる情報の保持は順送りの訳出に特有の処理ではなく、あらゆるディスコース処理に伴う一般的処理である。ディスコース処理は常に先行情報から得られた理解に依存している。ディスコースの一貫性のある理解には先行情報の保持が不可欠であり、記号列の処理の背後には持続的な心的表示の構築がなければならない。順送りの訳出を実行するにあたって訳出単位に必要な情報は、この一般的処理を活用することで用意されていると考えられる。

ここでは、サイトラ作業において保持される情報には内容的概念と機能的概念の 2 種類があり、これによって順送りの訳出のための訳出単位に必要な情報が準備されていることを示した。ここから得られた知見を手がかりに、どのような手掛かりに注目し、どのような情報を保持すべきかをより具体的に考えることができる。では、準備された情報を記号列として再表現する際にはどのような処理がなされているのだろうか。次節では、訳出単位として準備された情報を訳出するためにどのような認知処理がなされているのかを見る。

5. 組換え

順送りの訳出のためには、起点言語と目標言語の構造的差異を乗り越える必要がある。ST の分割箇所から構築した内容を ST での情報の順序を保ちつつ目標言語に表現するための概念的操作が必要である。英語原文で制限用法の関係詞節や後置修飾の分詞句が名詞句の後に置かれている場合、典型的な文法訳読方式でこれを日本語に置き換えるなら、ST での情報順序を逆転し TT に訳出するのが常である。これを順送りで訳出するためには、何らかの工夫が必要である。この工夫については言語レベルでの変換として公式的に記述できる部分もある。しかし、本稿では、そうした言語的変換を支える概念的処理の観点からこの問題を考察し、この処理を組換えというキーワードでとらえる。

まず、(7) では訳者 C が “from a pretty grim fate” (E005) を「険しい運命と」と訳出した点に注目する。ST の “struggling hard to save the human species from a pretty grim fate” (E005) で ‘fate’ は ‘save’ の起点を示しているが、訳者 C の「険しい運命と闘わなくてはなりません」(JC005) という訳出では ‘fate’ は ‘struggling’ の対象ととらえられている点で ST とは表現上の差異が認められる。ここで ST の文法形式からの離脱が起こった理由は訳者 C の分割処理にある。訳者 C は “to save the human species from a pretty grim fate” (E005) を “to save the human species” (E005) で分割し「人類を救うために」(JC005) と訳出したことにより、“from a pretty grim fate” (E005) を訳出するための述語を先行部分に含まれていた ‘struggling’ と結び付け、‘fate’ を主題としてとらえたのである。ST では ‘save’ の起点としてとらえられていた ‘fate’ を、訳出のために ‘struggling’ の主題としてとらえなおしている。ここには ‘save’ と ‘struggle’ の二つの事象と ‘fate’ の位置づけの変更、すなわち事象の構成の組換えが認められる。

(7)

E004	in particular, and all the rest of us—will have to be in there struggling hard		
JA004	そして誰も、特に皆さんは、他の人と同様、		直接に関わって
JB004	です。我々は皆、特に皆さんは		どうしても
JC004	若い皆さんは特にですが、	若くない人も皆	悪戦苦闘して
E005	to save the human species from a pretty grim fate.		
JA005	懸命に戦わねばなりません。人類を極めて深刻な運命から救わねばなりません。		
JB005	懸命にたたかって、	人類を	暗い運命から救わなければ
JC005		人類を救うために	険しい運命と闘わなくてはなりません。
E006	Well, my wife and I happened to be in Europe on November 8th, that fateful		
JA006	私の妻と私は	たまたま	ヨーロッパにいました。11月8日の
JB006	ばなりません。	妻と私は たまたま	11月8日に
JC006	妻と私は、	たまたま	ヨーロッパで11月8日を過ごしており、

同じ“from a pretty grim fate” (E005) を訳者 A および B は、それぞれ「極めて深刻な運命から」(JA005)、「暗い運命から」(JB005) と訳出しており、‘fate’ を起点としてとらえるという点では ST の文法に忠実な訳出を行っている。訳者 A および B は “to save the human species from a pretty grim fate” (E005) をひとつのまとまりとしてとらえたため、この個所での ST の文法情報をそのまま活用している。ここから分割の仕方が組換えに関与することがわかる。

一方、“to save” (E005) は不定詞の副詞的用法であり “struggling” (E004) の目的を示す。訳者 C の訳出は「人類を救うために」(JC005) とこの文法事項に忠実な訳出を行っている。しかし、訳者 A および訳者 B の訳出にはこの目的の意味は表れていない。訳者 A は “will have to be in there struggling hard” (E004) までを「直接に関わって懸命に戦わねばなりません」(JA004) とし、“to save the human species from a pretty grim fate” (E005) を「人類を極めて深刻な運命から救わねばなりません」(JA005) と訳出している。訳者 A は「戦わねばなりません」(JA005) と「救わねばなりません」(JA005) をともに “have to” (E004) に由来する義務の意味に関連付けている。訳者 B の「どうしても懸命にたたかって、人類を暗い運命から救わねばなりません」(JB005) も類似の処理であり、同じ個所で分割している。「どうしても」(JB004) は “have to” (E004) に由来すると判断でき、ここでも義務の意味は「戦う」と「救う」の両方に関連付けられている。ST における “struggling” (E004) と “to save” (E005) は文法的な並列関係にはない。にもかかわらず、訳者 A および訳者 B はこれを並列情報としてとらえている。ここで ‘struggle’ と ‘save’ は手段と目的の関係にあり、ST の文法を離れてとらえればひとつの時系列のうえで生じる連続事象としてとらえられる。そのため、一方の事象が義務であれば、その属性は他方にも引き継がれるととらえることができる。こゝでも事象とその属性に関する組換えであり、事象の組換えの一例と考えてもよいだろう。

いずれの場合も、順送りの訳出を実行するため、ST の言語形式から逸脱し、情報の組換え

えが行われている。こうした組換えは、目標言語への訳出に向けた発話計画の一端であり、通常の発話理解においては必要とされない。組換えは訳出という行為に特有の認知作業と言える。

次に順送りの訳出のため、訳出表現に使用された要素が ST とは異なる統語範疇で現れた例を見る。ここでは (8) の “the fall” (E009) の扱いを手がかりとする。

(8)

E009 that I can remember, was in February 1939 at the—it was about the fall of

JA009 論文、覚えている限り最初だと思いますが、それを書いたのは1939年2月でした。

JB009 私の最初の論文、少なくとも憶えている限りの最初のものは、1939年2月の

JC009 覚えている限りのものですが、1939年2月でした。それは、

E010 Barcelona to Franco’s fascist forces. And the article, which I’m sure it was not

JA010 ちょうどバルセロナがフランコのファシスト軍の手に落ちようとしていた時です。

JB010 論文でした。それはバルセロナがフランコのファシスト勢力の手に落ちる

JC010 フランコ将軍の独裁勢力によるバルセロナ陥落についてです。その論文は、たいてい

ここで “the fall of Barcelona to Franco’s fascist forces” (E009) を、訳者 C は「フランコ将軍の独裁勢力によるバルセロナ陥落」(JC010) と訳出している。ここではこの箇所がひとまとまりとしてとらえられ、ST で名詞句として表れている “the fall” (E009) は TT でも名詞句として訳出されているが、到達を意味するはずの “to” (E010) の意味は表れておらず、‘Franco’s fascist forces’ は ‘fall’ の動作主としてとらえられており、情報の組換えが観察できる。

同じ個所を訳者 A と訳者 B は、それぞれ「バルセロナがフランコのファシスト軍の手に落ち」(JA010)、訳者 B は「バルセロナがフランコのファシスト勢力の手に落ちる」(JB010) と訳出している。「手」が使用されているのは、「手に落ちる」という慣用句が選択されているためであるが、この選択により “to” (E010) の持つ到達の意味が表れていることは注目に値する。これにより ‘Franco’s fascist forces’ を到達の対象として訳出することができたのである。一方で、いずれの訳者も ‘Barcelona’ を主題として扱い、ST では名詞で生起していた ‘fall’ を述部に使用し「落ちる」という動詞を使っている。

統語範疇は、ある概念をある言語で表現する際に文法的要請から与えられる言語情報である。この点において、統語範疇は文法関係と同様に概念から切り離すことのできる言語情報である。この言語情報と概念の関係は概念的複合体 (e.g. 船山 2006, Ishizuka 2012) の考え方からの論理的帰結である。(7) でみた操作は言語レベルの記号変換処理と見なされがちであるが、fall という語彙の含む情報を異なる言語、異なる統語範疇で再表現するためには、個別言語の統語範疇といった形式から自由な認知情報を想定すべきであり、これが概念と言語を関係づける認知処理の対象となっていると考えるべきである。つまり、ST から

TT への統語範疇が変更される背後では、ST での認知情報（概念）と言語情報（形式）の関係を破棄し、TT のために新たな関係を確立するという認知処理が必要である。こうした統語範疇の組換えは、品詞の転換として、どのような翻訳形態においても観察しうる現象であり、翻訳の方略としても扱われることもある（e.g. 田辺・光藤 2008: 33）が、順送りの訳出のためにもしばしば有効である。

ST と TT の間で主要な内容語の対応付けができる場合、言語形式からの離脱はあまり目立たないかもしれない。しかし、言語形式からの離脱の度合いは内容語の対応関係のみでは測れない。文法関係、統語範疇などの統語論レベルでの組換えの観察も重要であり、その背後には事象参加者の配置など意味論レベルでの組換えもある。これを Seleskovitch (1978/1998) の *deverbalization* と同じものと見なすことはできない。しかし、訳出における言語形式からの離脱はさまざまなレベルで生じており、順送りの訳出においても無視できない役割を果たしていることは事実である。

統語範疇や文法関係の変更は、概念の働きに支えられているとはいえ言語レベルの組換えであり、概念レベルの組換えとは異なる。ここで (6) に立ち戻り、概念レベルの組換えの例を見てみよう。

(6)

E020	German weekly, Der Spiegel. It depicted a caricature of Donald Trump
JA020	ドイツの週刊誌 デア・シュピーゲルの表紙でした。そこには、風刺漫画があり、
JB020	ドイツの大手週刊誌、シュピーゲルの表紙に見られます。それは
JC020	ドイツの主力週刊誌『デア・シュピーゲル』の表紙でした。そこに描かれている風刺画はトランプ大統領が
E021	presented as a meteor hurtling towards Earth, mouth open, ready to swallow
JA021	トランプが地球に向かって突進する流星として描かれています。口を大きく開け、
JB021	ドナルド・トランプが流星に戯画化され、地球に突進し、口を開けて、
JC021	隕石となって地球に向かい、口を開けて、まさに丸飲みしようと
E022	it up. And the top headline read "Das Ende Der Welt!" "The End of the World."
JA022	地球を飲み込もうとしています。そして、大見出しには、
JB022	地球を飲み込もうという絵でした。そして大見出しは地球
JC022	しています。大見出しは「世界の終わり」、

まず、訳者 A の “It depicted a caricature of” (E020) は「そこには、風刺漫画があり」(JA020) と訳出されている。この「そこ」(JA020) は直前の起点切片に含まれる「デア・シュピーゲルの表紙」(JA020) を指示する。「あり」(JA020) の連用形は “of” (E020) から機能的概念を捉えることで、ST 後続部分で “caricature” (E020) の内容が述べられることを予測し、これを訳出する準備がなされていることを示している。しかし、場所を表す「そこには」(JA020) や、存在を表す「あり」(JA020) といった要素は ST には認められない。ST では事象 ‘depict’

に対し動作主 ‘cover’ と主題 ‘caricature’ がとらえられているのに対し、TT では主題 ‘caricature’ が場所 ‘cover’ に存在するという状態がとらえられている。‘depict’ は存在の原因であり、ST と TT では同じ因果系列の事象を捉えているのではあるが、系列のどの部分を捉えるかという点において差異が認められる。これは事象の切り取り方という面での組換えと言える。次の「トランプが地球に向かって突進する流星として描かれています」(JA021) では ‘Trump’ が ‘present’ の主題としてとらえられている。この訳出では “Donald Trump presented as a meteor hurtling towards Earth” (E020) の文法情報をほぼそのまま使用している。これは “Donald Trump presented as a meteor hurtling towards Earth” (E020) をひとつの起点切片としてとらえたことによる。

一方、訳者 B の「ドナルド・トランプが流星に戯画化され」(JB021) は ‘Trump’ を ‘caricature’ の主題としている。これは “a caricature of Donald Trump presented as a meteor” (E020) をひとつの起点切片としたことによる。しかし、ST の “caricature” (E020) は名詞であり、「戯画化」(JB021) という事象として使用できる要素ではない。ST を確認すると ‘caricature’ を事象として訳出するための要素は “presented” (E021) に認められる。ここから ‘caricature’ は “caricature” (E020) と “presented” (E021) から得られた情報が融合し事象としての意味を備えたと判断できる。すなわち、ST においては動作 (present) と生産物 (caricature) という区別を持ち、二つの要素として表れていた情報が TT においてはひとつの要素としてとらえられている。この組換えでは概念の融合が見られる。

次に訳者 C は「トランプ大統領が隕石となって地球に突進し」(JC020) として、‘Trump’ を ‘hurtling’ の動作主として使用したうえ、引き続きこの要素の意味役割を維持し、‘open’ および ‘swallow’ の動作主としても使用している。一方、ST の “Donald Trump presented as a meteor hurtling towards Earth, mouth open” (E020) の “Donald Trump” (E020) と “meteor” (E021) は同一の指示対象を共有しているが、その文法的機能は明確に区別される。“Donald Trump” (E020) は “caricature” (E020) の主題として扱われている。一方、“a meteor” (E021) は事象を表す “hurtling” (E021)、“swallow” (E021) の文法的な動作主であり、状態を表す “mouth open” (E021) の主題でもある。こうした ST の言語形式からの逸脱は “Donald Trump presented as a meteor” (E020) をひとまとまりとし、「トランプ大統領が隕石となって」(JC020) と訳出した際に生じたと観察できる。「なって」(JC020) は ‘Trump’ と ‘meteor’ を同一の実体としてとらえており、ここにも概念の融合が認められる。これにより ‘Trump = meteor’ を ‘hurtling’、‘open’、‘swallow’ という三つの事象に共通する動作主としてとらえ言語化することが可能となっている。

以上で、順送りの訳出を可能とする組換えの例として、統語範疇の変更といった言語レベルでの組換えの他、事象の構成、事象の切り取り方、概念の融合といった概念レベルのさまざまな組換えを確認した。訳出単位に含まれる情報を TT の切片として訳出する場合、その目標切片単独の適切性のみではなく、TT のディスコースとしての整合性も考慮する必要がある。その際、起点言語と目標言語の統語構造の差異を乗り越えるために概念的な組

換えが生じる。この場合、組換えは目標言語にとって自然な訳出をするための処理と言えるだろう。

本稿では順送りの訳出を実現するための組換えに限定し考察したが、組換えの必然性は他にも考えられる。例えば、情報保持の長期化に起因する組換えもあるだろう。記号列の保持は作動記憶に大きな負担がかかる。そのため、保持情報は非自覚的に概念化されるだろう。言語に固有の思考様式の差異がある事象や状況を異なる言語への訳出するための組換えを要求することもあるだろう。言語はある事象や状況に含まれる情報のすべてをコード化するわけではなく、コード化の際には何らかのスキーマ化が必要である。このスキーマは言語により異なる。したがって、ある思考を言語化する際にはその言語に固有の特徴が表れる。こうした言語相対論の立場から、Slobin (2003: 167) は英語-スペイン語間の翻訳における様態動詞の振る舞いから、翻訳における個別言語の影響を指摘している。ある起点言語にコード化された事象や状況を目目標言語に再コード化するためには、異言語間の思考様式の差異を乗り越えるための操作が必要である。そうした認知プロセスを船山 (2012) は「通訳するための思考」と呼ぶ。

6. 考察

ここまでサイトラの順送りの訳出の背後で分割・保持・組換えの三段階がどのような役割を担っているかをサイトラの規範訳を用いて具体的に検証した。これは順送りの訳出を可能とする認知処理を考察するための大枠である。この節ではこの理論的枠組みを精緻化するための課題を示したうえで実証研究、応用研究への可能性と期待を述べる。

6.1 理論的精緻化への課題

本稿では TT の節を訳出単位として分析した。しかし、TT の産出は節の情報を確保した後で始まるわけではなく、句レベルの情報しか得ずに訳出が始まる場合もある。(2) を振り返ってみると、“November 8th” (E006) を訳出範囲に含むかどうかの判断には揺らぎが見られるが、いずれの訳者も TT の節を構成するための情報を待たずに訳出を始めている。多少、表現の違いはあるが、いずれの訳者も “my wife and I” (E006) をとらえたあたりでハ格を伴う主語として「私」と「妻」の訳出を始め、“happened to be” (E006) をとらえつつ訳出を進めている。いずれも「たまたま」の訳出時点では、節の終え方を定めていないだろう。順送りの訳出において、どこまでを節に含む情報とするかを、訳出を進めながら決めることは珍しいことではない。

(2)

E006	Well, my wife and I happened to be in Europe on November 8th, that fateful
JA006	私の妻と私は たまたま ヨーロッパにいました。11月8日の
JB006	ばなりません。 妻と私は たまたま 11月8日に
JC006	妻と私は、 たまたま ヨーロッパで11月8日を過ごしており、
E007	day, in fact, in Barcelona, where we watched the results come in. Now, that
JA007	あの運命的な日です。 バルセロナで あの結果を見ました。
JB007	ヨーロッパにいました。 あの運命の日バルセロナにいて、 結果を見ました。
JC007	あの運命の日には実はバルセロナで、 選挙結果が出るのを見ました。さて

こうした訳出単位内部の判断がどのように行われているのかは順送りの訳出の仕組みを解明するための重要な課題である。むろん、順送りの訳といっても、STの語順のすべてをTTで完全に保つことはできないし、その必要もない。例えば、*John gave Susan a book.* を「ジョンはスーザンに本をあげた」と訳せば *gave* は順送りで訳していないことになるが、サイトラにせよ同時通訳にせよ、これが問題視されることはないであろう。では、どの程度、順送りにすべきなのか。この点については、さらなる検討が必要である。

6.2 実証研究への期待

本稿で使用したデータは実務・指導の両面において十分な経験を持つ訳者によるものであるが、サイトラを想定した規範訳を文字で表現したものであり、実際のサイトラから収集したものではない。その点で、実際のサイトラ作業下での検証は今後の課題である。

実証にあたっては書き起こしデータの分析のみではなく、視線計測などを使った検証なども有効であろう。*Alves et al. (2010)* はアイ・トラッキング、キー・ロギングを用い、書記言語の翻訳の訳出単位などを同定しようとしている。サイトラ研究において、こうした手法は、より大きな力を発揮すると思われる。特に上記で課題とした節より小さなレベルでの訳出プロセスの進行について、より詳細な観察を可能とするであろう。

6.3 応用研究への発展

なぜサイトラは同時通訳訓練として有効なのか。両者の共通点は順送りの訳出であり、相違点は訳出ペースの制御と入力モードである。低速で不可能な作業を高速で実行できる可能性は低い。しかし、低速であっても実行できるならば、速度を上げられる可能性はある。サイトラは訳出ペースの制御が可能な条件で順送りの訳出を行うための訓練である。なぜサイトラを英語学習に応用できるのか。訳するためには（ある程度の）理解が必要である。順送りの訳出を行うためには順送りで理解する必要がある。すなわち、順送りの訳出を学習に取り入れることにより、順送りで理解し、読む訓練を行うことができる。本来、文章とは前から順に読まれるべきものであることを考えれば、これはより自然な理解を促

す指導であるともいえる。順送りで読むだけなら、必ずしも訳出は必要ではないが、訳を取り入れることにより、学習者は自分の理解の不十分さを自覚できるし、指導者は学習者の躓きを確認することができる。

いずれの場合でも、サイトラに必要な認知プロセスを明示化することにより、この作業を構成するプロセスを分解し、訓練する要素を限定することが可能となる。これにより、教育上の目的を明確にし、より効果的な方法を採用することができるし、どんな作業をどんな目的で訓練するのかを訓練者と被訓練者が共有することができる。

例えば、教材として使用する ST に指導者があらかじめスラッシュを入れておくということは、指導の現場でもよくなされる工夫である。これは本稿でいう分割の負担を軽減するのに役立つ。分割のスキルがオンラインでの理解および翻訳に大きな比重を占めるとすれば、これが訓練生にとって躓きとなる可能性がある。訓練生に区切りを表示した ST を与えサイトラをさせてみるという指導段階があってもいいだろう。

保持の側面に焦点を当てた指導も一考に値する。これを特定の文法現象と結びつけ、例えば代名詞の指示付与に注目するのも一案である。前方照応の代名詞を理解するためには、先行部分で指示された事物を保持せねばならない。指示付与にはテキスト内に現れる実体をとらえ、この情報を保持する認知能力が必要である。関連性理論という飽和などの推論 (Carston 2002) も、こうした保持を前提として可能となる。指示付与は直前の名詞句の指示対象を充てることで解決できる場合も少なくないが、非言語情報を取り込んだメンタルモデルの構築がなければ実行できない指示付与もある (Wykes 1981)。指示付与に伴う事物の保持は単なる語句の保持ではなく、ディスコース理解に付随する現象である。

7. まとめ

順送りの訳出の背後でどのような認知処理が行われているのか。本稿ではサイトラの順送りの訳出を可能とする認知プロセスを分割・保持・組換えの三側面から考察した。三つの段階はいずれも ST の理解を基盤としており、ST から取得した情報を「どのように切り、どのように繋ぐか」という工夫につながる。順送りの訳出はサイトラや同時通訳を可能とする訳出方略である。その背後にはこうした方略を実現するための独特な認知処理がある。本稿の例が示す通り、これらの作業は互いに連関しつつ同時進行しており分離するはできない。しかし、三側面を個別に分析することにより、順送りの訳出を可能とする認知処理の一面を素描することはできたのではないか。今後、本稿で明らかになった課題を含め、理論的精緻化を進めれば、表面的な言語作業の背後で進行する認知プロセスを具体化することができる。また、ここから実証研究への道につながることを期待される。そこで得られる成果は実務者養成や外国語教育への応用にも広がる可能性がある。

【使用データ】

Chomsky, N. With Trump election, we are now facing threats to the survival of the human species

[Online] https://www.democracynow.org/2017/1/2/noam_chomsky_with_trump_election_we (2018年2月21日)

.....

【著者紹介】

石塚浩之 (ISHIZUKA Hiroyuki) 広島修道大学教授。主な研究テーマは通訳翻訳の認知プロセスの明示化。

.....

【註】

1. サイトラを通訳訓練の一形態ととらえる場合もあれば、実務現場での訳出方式の一つとしてとらえる場合もある。実務現場では、原稿付きの同時通訳をサイトラということであれば、音声なしの文字原稿からの口頭訳出をサイトラと呼ぶこともある。
2. 本稿で使用した訳出データは日本通訳翻訳学会サイトラ研究プロジェクト (2016-2018) のメンバーの協力を得て作成した。
3. 個人差を超えた分割の規範を探るため、ST を分析する立場もあり得る。しかし、本稿では分割の方法が異なっても訳出が成立しうる事実に着目し、実際に訳者が行った分割の実態を分析するため、TT を手がかりとする立場をとる。
4. さらにこれは TT が聞き手に取って理解しやすいものとなるかどうかにも影響する可能性がある。

【引用文献】

- Alves, F., A. Pagano, S. Neumann, E. Steiner and S. Hansen-Schirra. (2010). Translation units and grammatical shifts: Towards an integration of product- and process-based translation research. In G. M. Shreve and E. Angelone (eds.), *Translation and cognition* (pp. 109-142). Amsterdam: John Benjamins.
- Carston, R. (2002). *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.
- Cowan, N. (2005). *Working memory capacity*. New York and Hove: Psychology Press.
- 船山仲他 (2006) 「発話理解のオンライン概念表示」『外大論叢』57 : 1-22. 神戸市外国語大学.
- 船山仲他 (2012) 「通訳するための思考」『通訳翻訳研究』第12号 : 3-19.
- Ishizuka, H. (2012). *Conceptual processing in English-Japanese simultaneous interpreting* (Doctoral thesis, Kobe City University of Foreign Studies, Kobe, Japan).
- 石塚浩之 (2016) 「同時通訳における概念骨格：心的表示の持続性と流動性について」『通訳翻訳研究』第16号 : 85-105.
- 水野的 (2015) 『同時通訳の理論：認知的制約と訳出方略』朝日出版社.
- Seleskovitch, D. (1978/1998). *Interpreting for International Conferences*, Third Revised Edition.

Washington, D.C: Pen and Booth.

- Slobin, D. I. (2003) Language and thought online: Cognitive consequences of linguistic relativity'. In D. Gentner and S. Goldin-Meadow (eds.), *Language in mind: Advances in the study of language and thought* (pp. 157-192). MA. MIT Press.
- 田辺希久子・光藤京子 (2008) 『英日日英 プロが教える基礎からの翻訳スキル』三修社.
- Viaggio, S. (1992). The praise of sight translation (and squeezing the last drop there out of). *The interpreters' newsletter*, 4: 45-58.
- Viezzi, M. (1989). Information retention as a parameter for the comparison of sight translation and simultaneous interpretation: An experimental study. *The interpreters' newsletter*, 2: 65-69.
- Wykes, T. (1981). Inference and children's comprehension of pronouns, *Journal of Experimental Child Psychology*, 32: 264-78.

